

危機に瀕した「まちなか遺産」を未来に

彦根城築城400年を迎えた彦根。その貴重な歴史遺産は、お城周辺だけでなく、街のなかに近世・近代の生活遺産として数多く残されています。まちじゅうが「生きた博物館」と言っても過言ではありません。

しかし、近年、その貴重な遺産と歴史的な景観が急速に失われています。

彦根景観フォーラムでは、2006年12月に「彦根歴史散歩—過去から未来をつむぐ—」を発行しましたが、この本をもとに5回にわたり、彦根のまちなかに残る貴重な遺産・歴史景観に焦点をあてて、「ほんもの」の価値と魅力を探ります。

第1回 近世城下町はどう造られたか

○大規模な土木工事による芹川付替、堀の開削

関が原合戦後の慶長6年(1601)、伊井直政は佐和山に入り、佐和山にかわる新たな築城地として彦根の北にある磯山を選定しようとした。ところが翌年、直政は戦で負った傷がもとで死亡した。その後を継いだ直継は、築城地を彦根山に変更し、慶長9年(1604)彦根城の築城工事を開始した。併行して城下町の建設も始まり、芹川の付け替えや自然地形を利用した堀の開削など大規模な土木工事が行われた。

城下町形成以前、芹川は現在のJR東海道線芹川踏切付近の猿尾から北に向かって流れていたが、城下町建設に際して堀として利用するため、現在の川筋に付け替えられた。旧港湾(外船町)辺りはかつての芹川の河口付近にあたり、その周辺は低湿地であった。城下外町の安清から外船町にかけて、街路に対して斜めに流れる水路やそれに沿って区画された街区が存在するが、おそらく旧河道の湧水抜きのため、城下町形成にあたり周辺街区より遅れて整備されたためであろう。



付け替られた芹川



外堀土居の一部

○町割とその機能(近世の都市計画がめざしたもの)

慶長9年、家臣団の地割とともに町人の町割が本町から始まった。城下町の建設は徐々に進み、大阪夏の陣を経て家臣の増加や町人の移住などにより、武士と町人の居住区が広がっていった。

城下町は第1郭から第4郭までの4つの区画に分けられる。

第1郭は天主を中心とした城郭である。天主の周りに、多門櫓、城主の邸宅、表御殿、米蔵・竹蔵・材木蔵などがあり、内堀と高い土塁や石垣で区画された

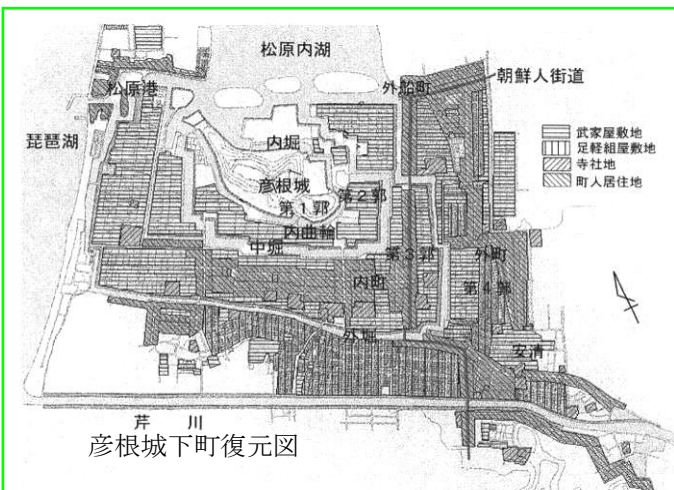
第2郭は内堀と中堀に挟まれた区域で、内曲輪(うちくるわ)・二の丸と呼ぶ。家老をはじめ上級藩士の武家屋敷や槻御殿、藩校などが置かれた。4ヶ所の門と土塁や石垣をめぐるせて、第3郭と厳重に区画されていた。

第3郭は、中堀と外堀に挟まれた区域で内町と呼ぶ。中級藩士の武家屋敷と町家からなる。中堀に面して武家屋敷がならび、中ほどに町人の居住区が設けられ、さらにその外側を取り囲むように武家屋敷があった。内町のまわりは、北は内湖で、東・南・西の三方は土塁や竹やぶをめぐるせていた。

第4郭は外堀の外側で外町(とまち)とよぶ。町人の居住区と比較的身分の低い藩士(徒士)の武家屋敷、足軽の組屋敷からなる。外町のまわりには7ヶ所の番所を設けて、城下町の警備にあたらせた。7つの番所には門が設けられていたが、そのひとつ長曾根御門の部材が最近発見され、景観フォーラムと滋賀県立大学などで調査を始めた。

このように、城下町の居住区は身分によって計画的に配置された。城郭に最も近い内堀に沿った内曲輪に重臣、それ以下の武士を禄高にしたがって第3郭を囲む内堀と外堀に面して配置し、内町の町人の居住区を囲んだ。第4郭では下級藩士と町人の居住区が混在していたが、もっとも外側には重臣の下屋敷や足軽の組屋敷を配置し、外町の町人居住区を包囲していた。武士の居住区は城郭・城下町の防衛の役割を果たしていたのである。

(「彦根歴史散歩」P46~47より)



屋根のない博物館づくり、 そして世界遺産登録へ

彦根には、江戸期の近世遺産や明治以降の近代化遺産、自然環境が豊富にあります。街なかの各地域に、歴史や文化・産業・自然の現地体験場があり、発見の小径をたどりながら、ホンモノを体験できるということです。しかも、城、城下町、中山道の宿場まで统一的に体験できるのです。まさに、屋根のない博物館の条件は揃っているのです。

この条件を生かして、屋根のない博物館づくりがで

きれば、来訪者産業と呼ばれるコミュニティ・ビジネスが成立し、多くの歴史遺産が経済価値を産み出す源泉になります。これによって歴史遺産の活用可能性は飛躍的に高まり、保全も可能になります。

また、屋根のない歴史博物館づくりは世界遺産登録を前進させる道でもあります。なぜなら、城郭を超えた城下町彦根の価値の主張であり、市民の参加と活動が前提だからです。

我々NPOは、「屋根のない歴史博物館づくり」「世界遺産登録」を具体的な目標に掲げて、歴史を刻んだ共生の彦根づくりに貢献する所存です。

彦根景観フォーラム理事長 山崎 一眞

連載 創造的修景を考える

—よりよき次代のために— 建築家 戸所 岩雄

第8回 彦根の目指したい「まち像」

— 発展・活性化とは —

今、彦根のまちでは「築城400年祭」がスタートし、桜の花の下、市議選、県議選が行われています。

あわただしい中にも明日への息吹が感じられ、新しい出来事への期待あふれる春です。そんな中、6月の施行が予定されている「景観計画」（詳細は広報等）に対して市民のパブリックコメントを聞く会等も開催され、関心も徐々に高まってきたように思われます。話題にもあがり、“積極的に評価する人”、“発展や活性化にマイナスなのでと評する人”、“時期が悪いという人”、など様々聞こえてきます。それぞれの的を得た意見です。

しかし、この「景観計画」が発展や活性化を阻止するとの考えには少し異論を述べさせてもらっています。

発展するということはどういうことなのか。辞書には発展とは、「いっそう栄えていくこと」とあります。

何がより栄えていくのがこのまちにとって好ましいかとの選択が今、必要です。

活性化とは、「活発 — 元気で勢いがいい様子 — にすること」とあります。

心が活々とあり、穏やかな営みができること。その実現を発展と



千松会館



石像

考えてもよいのではないのでしょうか。そのことは経済的なマイナスをもたらすものではなく、まちの価値を高め、大きな経済効果をもたらします。

消費が最大の価値である大都会への移行を目指すのではなく、文化やコミュニティのつながりを蓄積してゆくまち、心の活性化をもたらし、情感あふれ、自然豊かなまち「ひこね」を目標に、発展活性化してほしいと考えます。

古のコピーだけではなく、第1回から第7回までの「創造的修景を考える」の中で述べてきたように、この「景観計画」をふまえた創造性あふれるまちをめざして！！



千祥（いと重菓舗）ビル

LLP「ひこね街の駅」設立へ

彦根景観フォーラムのメンバー数名が設立に関わった有限責任事業組合（通称LLP）「ひこね街の駅」が4月にスタートします。

活動拠点を花しょうぶ通りの寺子屋「カ石」に置き、主力は、①、商品の企画・開発・販売、②、街づくりコンサルタント、③、地域ツアーの企画運営、④、街の駅店舗の運営 などです。